

ブエノスアイレス日本人学校 (その8 先生たちのNHKのど自慢出場奮闘記)

三保 貴資

1. はじめに

日曜日のお昼、たいてい母が食事をしながらのど自慢を見ているので、私も時折横でぼんやり見ていることがある。

日本に帰国してから20年以上たち、私が日本人学校の一員としてあの場に立っていたことの記憶はかなり薄れつつあった。しかし、今回この原稿依頼を受けてから、改めて録画を見たり、自分の記憶をたどったりし、当時の実行委員会が編集してくださった感想文集を読み返してみると、あの時確かに私たちは、あの夢の舞台に立っていた。予選に向けて練習したこと、出場が決まって大興奮したこと、そして他の24組の方々と共に本選に出場し、3000人の観客を前に緊張しながら歌ったことが鮮明によみがえってきた。再びあの頃の思い出に光が当たるのは大変うれしいことだ。

のど自慢は、日本でも長寿番組の一つであり、映画の題材になったこともある。出場を夢見て何度も何度も挑戦されている方がたくさんいることは承知している。また、アルゼンチンで開催された時には日系人の方々が、遠くからたくさん来られ、会場のグランレックス劇場には2時間も前から500m以上の列が並んでいたとのことだった。日本から遠く離れたアルゼンチンでも関心の高さが伺える。このような国民的な番組にまさか私たちが出場することができようとは、夢にも思ってみなかつた。



会場のグランレックス前



通訳の中原ナンシーさん、宮川泰夫アナ

2. 申し込みから練習まで

どうやらのど自慢がアルゼンチンで開催されるらしい、といううわさは7月頃には私にも耳に届いていた。当時からNHKはアルゼンチンでも見ることはできたが、のど自慢はあまり見ることはなかったし、正直関心もなかった。しかし、異国の地でのど自慢がこんなにも身近になることなど本来ありえない話だ。一生に一度の思い出に予選だけでも出場してみようかな、なんて気持ちにもなったが、選曲から練習、そもそも出場のための手続きのことを考えると、面倒くさがりの私にとっては、かなりハードルの高いものであった。

そんなとき、日本人学校のリーダーであった金子教諭の、みんなで出場しませんか、との提案に私だけではなく教職員みんなが賛同した。申し込みの手続きは金子教諭がすすめて

くれた。当然予選には出場できるものと思っていたが、後で聞いたら400人以上の出場の申し込みがあったそうだ。そのうち210名が選ばれ予選への出場となった。書類審査で200名弱の方々が予選にすら出場できなかったことを考えると、おそらく申し込み書類のPR文が素晴らしい内容だったに違いないと今になって思う。

予選を間近に控え、練習が始まった。曲はモーニング娘の「ハッピー・サマー・ウェディング」。この曲はブエノスアイレス日本人学校の運動会の応援合戦で子どもたちが歌って踊った曲である。すばらしい選曲だと思った。子どもたちのためにも頑張ろうと皆が決意を新たにした。池田教諭が子どもたちの振り付けをアレンジして構成してくれた。練習が進むにつれて、歌って踊ることの難しさを痛感した。おそらく私たちの出番は1分程度であろう。そのわずか1分、しかもそれぞれが歌うのは1フレーズ程度であるが、これがなかなかうまくいかない。出場者は9名であったが、9名の歌と踊りが揃うことは至難のわざであった。メリハリのある踊りで見栄えよく、おもしろく、そしてタイミングを合わせ、しかもインパクトのある歌を披露しなければならない。皆で考え、いろいろと知恵を出し合った1週間であった。最後はなかなかの仕上がりとなった。皆が主体的になり、対話を通して新たな価値を創造する、まさに今回改定された学習指導要領の「主体的、対話的で深い学び」につながる体験であったと今さらながら思う。さすが20年以上前に未来の教育を先取りしていた教職員集団だ。

3. いよいよ予選

さて、予選は2001年10月6日土曜日であった。練習した成果を発揮できるという高揚感と心地よい緊張感をもって会場に着いた。

私たちの番号は151番であった。つまり私たちの出番は210組中、151番目だ。朝11時に会場に着いて、12時半ごろから予選が始まり、終わったのは午後6時という長丁場であった。その間、私たちはロビーで迷惑にならないように練習したり、昼食をとったり、休憩したりしたが、ほとんどの時間は客席で他の出場者の歌を聴いていた。



実はのど自慢は予選がとにかく面白いことがよくわかった。約200組の曲を聴いたが、飽きることはない。完全に受け狙いに徹した某日系企業の社長さんが歌う「月光仮面」。きっと普段はきりっとスーツを着ておられると思うが、凝った衣装で場を盛り上げようとする意気込みを感じた。(後で聞くと、このかたあのスクールメイツ第一期生だったとか)

ガウチョの衣装を着て生ギターで「神田川」を歌うJICAのお友だち。どこからどう見てもアンバランスなのに本人は真面目だ。本気で本選出場を狙っていたらしいが、こちらも爆笑しながら応援した。慎吾ママになりきって歌うアルヘンティーナもいた。そう、心地よい違和感や非日常を味わうことができ、もうこれだけで大満足であった。100歳近いご老人も歌っておられた。何千キロも離れた移住地からのご参加であった。日系人の方々にとってのものど自慢は人気番組であり、出場することはあこがれなんだとしみじみ感じた。

さて、私たちの出番は午後4時過ぎであった。20組ずつステージに上がる仕組みである。本番ではライトが照らすステージで歌うのは本当に気持ちがよかった。わずか2分にも満たない時間であったが、自分たちの練習の成果を精一杯に表現した。練習の時のCDよりも曲のテンポが遅く、少々ミスもしたが終わった後は晴れやかな気持ちであった。

午後7時半に合格発表であった。25組の合格者のうち、かなり早くに多くの出場者が発表されてしまい、こりゃダメだと思っていたが、なんと「151番、『ハッピー・サマー・ウェディング』を歌った方」と発表された時には、いい歳したおっさんたちが子どものように飛び跳ねながら喜んだ。本当に嬉しかった。

本選出場者はステージに上がるよう指示があった。ステージでは、あまりの喜びに涙する人、家族に携帯で知らせる人などさまざまであった。私たちは応援のために残ってくれた子どもたちや保護者の方々に大きく手を振って感謝の気持ちを伝えた。その後は本番での演奏のためのテンポやキー、前奏の長さの調整をした。終わったのは10時過ぎであった。

4. 夢の舞台

10月7日日曜日の朝は早く起床した。気持ちが高ぶってあまり眠れなかった。集合は午前8時。午後3時の開演までの間はリハーサルやオープニング、エンディングの練習、ゲストの鳥羽一郎さん、坂本冬美さんのリハーサルを見た。昨日は宮川アナウンサーが、本番では普段通りの格好でいいですからね、と言っていたのに、出場者は振袖やドレスなどの衣装を身にまとい、完全にスイッチが入っていた。アルゼンチンにはたくさんの日系人の移住地があって、それぞれの土地でカラオケ大会が頻繁に行われている。私も知り合いのお子さんが出場すると聞いたので応援に行ったことがあるが、10歳の子どもがタキシードを着て歌っていた。ステージで歌を披露するときは、衣装にも力を入れるというのはアルゼンチンの日系社会では当たり前のようである。

そして、いよいよ本番、手拍子と拍手に包まれ、ステージに上がった。なんてすばらしい景色なんだろうと思った。目の前に3000人の観客がいる、2階のすごく目立つ位置に手作りの横断幕で子どもたちや保護者さんが応援してくれている、みんな私たちに注目してくれていると思うと鳥肌が立った。当日のパフォーマンスは最高の出来だった。もちろん鐘がたくさん鳴るなんて思っていない。出場者の中での私たちの立ち位置はわかまえているつもりだ。宮川アナウンサーが本番前に「のど自慢は明るく、楽しく、元気よくをモットーにしています」と言っていたあの言葉を皆が体現しようと頑張った。音楽センスにあふれる先生2人がうまくハモリ、私はジャイアン声で怒鳴るように歌い、うま〜くキーを外してしまう先生もいれば、手のひらにカンペしていて、それを見ている姿をばっちりテレビに映された先生などバラエティーに富んだ1分間だった。今見てもテレビ映えしている。宮川アナウンサーと金子教諭とのやりとりも応援に来てくださった方々への感謝をさりげなく入れるなど、軽妙ではあるがとても好感のもてる姿であった。

私たちは他の24組の方々の歌もステージ上で聞き入った。現在プロで活動中の大城クラウディアさんやチャンピオン大会でも優勝し、演歌歌手としてデビューされた大城バネッサさんと同じステージで歌えたことは自慢の一つである。また、鳥羽一郎さん、坂本冬美

さんの歌声を間近で聴けたこと、同じステージにいたことは生涯一度だけの大切な思い出である。お二人は、観客のためにステージ上の曲以外にも何曲か歌ってくださったことを覚えている。

収録から1週間後、のど自慢が放映された。日本時間に合わせての放送なので、私はお友だちと集まって深夜に一緒にワインを飲みながら見た。当然話題の中心となりなんとも照れ臭かった。日本では地元の友人や近所の方が見ていて、半年後に帰国した時もまだ覚えていてくださって、「見たよ」「すごいね」と声をかけてくださった。ちょっとした凱旋帰国の気分を味わった。



明るく、楽しく、元気よく
右から2番目が筆者

5. おわりに

練習から本番、テレビ放映までの2週間は、今から思えば夢のような時間であった。当時の教職員同士でいまだにつながりを持ち、他県の教職員でありながら交流が続いている。あの当時最年少であった私も54歳となり、すでに退職された先生たちも多くなってきた。

あの2週間の思い出は、会えば必ず話題に上り、話が盛り上がる。私たちの人生の中でわずか2週間ではあるが、この思い出があるからこそ私たちの結びつきは深い。日本人学校の教員は、自ら海外勤務を希望して赴任している。一般の教員のほとんどが地元でキャリアを終えるが、日本人学校に勤務すると全国に同僚や教え子がいる。これは大きな魅力である。最近では、日本人学校への勤務希望者が減少していると聞く。海外勤務のリスクの方が魅力を上回ってしまっているのだろう。のど自慢に出場するという経験ができたのは、日本人学校に勤めていたおかげである。海外にも目を向け、同じような体験をぜひ若い教員にしてほしいと願っている。

最後に、のど自慢をアルゼンチンで開催できたのは、実行委員会の皆様をはじめ、関係者の方々のご尽力のおかげである。当時の私たちのアルゼンチン生活に鮮やかな彩りを添えてくださったことに深謝し、結びの言葉としたい。



本戦終了後子どもたちにあいさつ： 温かな歓声・拍手をもらいました



フィナーレ直後： 「NHKはこれではお帰ししません」 宮川アナの名調子で
鳥羽一郎、坂本冬美ショーが始まりました